

# 没理想論争注釈稿（十一）

坂井健

〔抄録〕

森鷗外と坪内逍遙による、近代文学史上最大の論争といわれる「没理想論争」についての注釈のうち、逍遙の鷗外への反論である「烏有先生に答ふ」（二）についての注釈の続き。「没理想論争」については、さまざまに論じられてきたが、そうした論が細部の読みの共通理解の上でなされているかという点、必ずしもそうとはいえず、ややもすれば机上の空論になりかねない現状がある。また、注釈についても、これまでは語釈レベルにとどまり、視点も個別作家の文学論としての見方に限定されがちであった。

そこで、本稿では、語句の注釈から出発して、解釈にまで踏み込み、両者の文学論争を総合的に捉えることを第一の目的とする。さらに時代を代表する両者の論争を通して、当時の文学思潮を探り、論争の文学史に対する影響についても考察を試み、「没理想論争」を、文学史の中で新たに位置づけすることを第二の目的とする。

キーワード 森鷗外、坪内逍遙、没理想、イデー、ハルトマン

## 烏有先生に答ふ（承前）

われ已に先生が詰問に答へ了りにたり。いでや、先生が審美論の由来を尋ねん。先生若干の例證を挙げて、先天の理想の存在を説き、更に詩に説き及びて曰へらく、

「叙情詩もしくは小説に理想あらはると云ふは、戯曲にあらはる、客観の相は叙情詩もしくは小説に於けるより多く、叙情詩もしくは小説にあらはる、主観の感は、戯曲に於けるより多きがためにしかおもはるゝのみにして、其の実は戯曲にも叙情詩もしくは小説には作者の理想、作者の極致はあらはるゝなり。唯々其の

理想は、抽象によりて生じ模型に従ひてあらはる、古理想家の類想に非ずして、結象して生じ無意識の辺より躍り出づる個想なり。小天地想なり。大詩人の神の如く聖人の如く至人の如くおもはる、は、理想なきが為ならず、其理想の個想なるためなり。小天地想なるためなり。大虚<sup>ダスツル</sup>の無意識中より意識界に取り継がれずして生れたる造化と同じ無意識中より作者(シェークスピア)の意識界を経て生れ出でし詩(戯曲)と、相似たるに何の不思議かあらむ。唯々無意識中よりの神来には真の大詩人ならでは多く逢はず、是れを以てシェークスピアが戯曲古今に独歩す。」

と。叙情詩もしくは小説に主観の感のあらはる、ことの戯曲に於けるよりも多く、戯曲に客観の相のあらはる、こと叙情詩もしくは小説に於けるよりも多きことは、われも曾て会得したり。また戯曲にも、作者の理想作者の意見のあらはる、こと、これもまた然りと思へり。<sup>③</sup>畢竟わがシェークスピアの傑作<sup>④</sup>を評して没理想といへるは、その作の全局<sup>⑤</sup>が酷だ造化の無底無辺なるに似たりといふ意なり。われいまだ造化の本来面目<sup>⑥</sup>を、絶対的の意味にて、見る可からずといはず。<sup>⑦</sup>ましてやシェークスピアの本来面目を絶対的の意味にて見る可からずと断言せんや。あらず、われは只古人が経見の結果をいひしのみ。そほとまればかくもあれ、わが謂ふ没理想の戯曲とは、シェークスピアの作中にも、最も傑出せるもの、みをいへり、悉皆を指せるにあらず。<sup>⑩</sup>シェークスピアの作といへども就中、壮年の作には、作者の影ほの見えたり。中年、晩年の作、はた爛眼をもて見ば、或ひは作家の影を捉らへ得べきが、只そのかりそめにも異説を容れ、反対の解釈を容れ得る間

は、仮にシェークスピアの傑作を名づけて、没理想と云ふも不可ならん。<sup>⑪</sup>例へば、『オセロー』なるイヤゴ<sup>⑫</sup>と『キング・リーヤ』なるエドマンドと、『リチャード三世』なるリチャード三世とを比べ見んに、其の獐悪性の根底に於て、多少の差別ありといへども、その大体の想に於ては、殆ど同類に属するものあり。仮にエドマンドを除きていへば、リチャードとイヤゴとの間には、差別を立つること頗る難し。其の故如何といふに、二者の著明なる差別は、むしろ其の境遇と官能的性質とに多うしてその極悪極奸の情性に於ては、殆ど互ひに通ずる所多く、二者共に実の象にあらずして、想の影なることいぢるし。<sup>⑬</sup>即ち、作者が理想的極悪人物の結象して現はれたるものなり。若しかくの如き人物を取りいでて、作者の理想見えたりといはゞ、げに没理想の説はわるかるべきが、こは全局の評にあらず、作者が理想の一斑を認めたる評といはんのみ。作者が全局の一面を評して没理想なりと名づけたる説は、これが為に毫も増減せらる、こと無し。テ<sup>⑭</sup>又嘗てシェークスピアを評して、彼れは人間の根柢性を狂と黙識せるもの、如し、人生の全局を夢局と悟りたるもの、ごとし、と做し、ハムレット、マクベス、リーヤ、オセローら幾多の人物を辨析して、その根柢の性に於て相類する所あるを證しき。しかすがに名家の見処<sup>⑮</sup>とて、他の曲学が、杓子定規の理屈評にまさること万々なり。さはれ、これを破せよといはゞ、破すること難からざらん。そは吾人の力、よくかの批評家を凌駕するが故にはあらず、シェークスピアの作が没理想なるが故なり。<sup>⑯</sup>先生が戯曲を評して、理想見えたり、と云ふは、人物の上に理想あらはる、といふ義<sup>⑰</sup>なるか、はたおしなべての戯曲の上

をいふか、そもくまたシェークスピアが傑作の全局に彼れが理想あらはれたり、といふか。他の異説を容れざること、ミルトン、バイロンらが叙情詩の、他の異説を容れざるが如くに、若しくは尋常多数の戯曲家が、理想を著しく其の作の全局に現じたるが如くに、理想を現じたり、といふ義なるか。若し第一の問ひの如しとあらば、われ先生の説に服す。若しくは第二の問ひの如しとあらば、われまた先生の説に服す。第三、第四の如しとあらば、われ未だ服する能はず。敢て先生が示教を乞ふ。

(本文の因にいふ、『女学雑誌』の投書家某、暗にわが没理想論を難じて、シェークスピアを論じ、シェークスピアは、正しく有理想にして大理想家なり。彼れは、例へば、フォールスタッフにはあらずしてヘンリー五世なり、といへり。ヘンリー五世がシェークスピアとは、古人も屢々いひしことなり。故いかにといふに、ヘンリー五世の史劇には、幾度も序曲といふ物を用ひて、コーラスに物語をせさせたり、即ち英王が智勇を讃へて、当時のシェークスピアが理想かと思ふ、節も、仄かに見えたり。是れ幾多の批評家が、ヘンリー五世をもて、シェークスピアが理想の人物(Hero)なるべしと推度せし所以なり。併しながら、か、らんは、詩に縁りて詩を判ずるといはんよりは、説を聞きて説を立つる物とやいはん。彼等に有挿評の拙き勸懲小説と没理想の好き戯曲とを見せば、いづれを取るやらん、兎に角に、三十五六歳の時の作をもて、五十二まで生きたりしシェークスピアを評せんには、早合点なるべし。)

わが没理想の本意は、上来反復して説きつれば、今はもはや余蘊なかるべきか。且つまた類想と個想との差別の如きも、嘗て「山房の論文」を読み、ほゞその要旨を領會しつ。わが戯曲の説を大いに抵觸する所ありとしも思はず。さすれば、没理想の解釈を除き去らば、先生とわれとの間に、解を異にする論点といふは、殆ど次の二点のみならず。

(第一) 先生は、先天の想といふもの宇宙にみちくたり、と信じ、われはこれを断ずること能はず。

(第二) 先生は、戯曲家の理想は結象して無意識の辺より躍りいづる個想なり、と信じ、われはこれを解する能はず。

案ずるに、先生が戯曲の説は、明かにハルトマンが無意識の哲学に胚胎せる必然的系論ならん。げにや、太虚の無意識中より意識界に取り継がれずして生まれたるものを造化となさば、先生の如くに戯曲を解することも或ひは論理の自然ならん。われは先生が審美論の由来の深遠にして且つ幽玄なることを信ぜざるにあらず、只、奈何にせん、われいまだハルトマンに通ぜざるがゆゑに、所謂想と実との關係を審かにせず、否、無意識に於ける智と意とが、如何にして全世界を生みけるかは、われほのかに知り得たれど、そが究竟の目的に於ける哲理は、われいまだ解すること能はず。ましてや、先生が意識を経て生まれいでぬる無意識の哲学は、そもまた如何なる形をもてるか、我れいまだ知ることを得ず。先生の謂ふ無意識の精霊は、客観の実体か、そが全世界を造りし究竟の目的は何ぞ。彼れは何が為にとて意識を造りしぞ。先生乞ふ、これを教へよ。われは無意識の實在を證せよ、とは

乞はず、又如何にして意識を造りしかを證せよ、とも乞はず。又如何にして一元の無意識が化して万象となりしかを證せよ、とも乞はず。只々その究竟目的の在る所を問ふのみ<sup>(34)</sup>。人あるひはいはん、かゝる質問は、審美学の本領を外れたり。しかれども、われは此の問ひに答へを得ざれば、仮令<sup>たとひ</sup>暗中より躍りいづる先天の理想が声音<sup>こゝろ</sup>は聞くとも、その声の實在を認むることを得ず。又如何にして戯曲家の個想が、無意識の辺より躍りいでて、大なる戯曲となるべきかを悟らず。將た如何にしてシェークスピアが、ひとり真成の大詩人と崇められて、古今に独歩するかを會する能はず。此に於てや、われ大いに惑へり。夫れハルトマンは最近哲学の大祖師<sup>(35)</sup>なり。そが形而上学を、『柵草紙』の限りある紙上に述べよ、と乞はんは、恐らくは無理ならん。しかれども、われは全豹を示せよ、と乞ふにあらず。且つ我れ不学なりといへども、多少の有縁境<sup>(37)</sup>にあり。たとひ直豎一指頭の教へによりて、先生が本領に融會する能はざらんとも、豈に一を聴いて其の二を推度するの智慧なからんや。いかで教へ給へ。

筆を擱かんとして、熟<sup>うつく</sup>思ふに、先生は積極にして、われは消極なり。先生は有なり、われは無なり。先生は明く、われは暗し。火に比せば、先生は噴火なり、山嶽これが為に震ひ、河海これが為に津浪す。われは不住の夕立雲、未だ稲妻のけはひもなし。水に喩へんか、先生は懸空の瀑布泉ならん。直下すること幾千仞、飛鳥をの、いて墜ち、山鬼驚きて泣く。われは峽間<sup>かひ</sup>なる湖<sup>みづうみ</sup>の、まだ流れゆかん行方を知らず。先生は猶ほ大明のごとし。紅輪<sup>(36)</sup>わづかに海角<sup>(38)</sup>を離れて、群陰<sup>(39)</sup>皆影を伏す。況んや赫々として雲漢<sup>(40)</sup>の表に騰る時をや。金をも流すべく、石を

も爍すべし。われは然らず。弥生の空のおぼろ月の、今尚ほなかに空にたゞよへりとも見るべきか。嗚呼、先生は已に立てり。好し建立門を開いて、大いに文を論じ、文界の衆生を濟度せよ。われは、やう／＼学に志せり。今より修業門に入りて、明治文学の為に素材を蒐めん。

## 注

(1) 先生が詰問・「早稲田文学の没理想」(『柵草紙』二七号、明治二四年一月)の「烏有先生」の論難。詳しくは、「没理想論争注釈稿」(二)(四)、(『文芸言語研究 文芸篇』筑波大学文芸・言語学系)二二(二)四号、一九九二(四年)参照。なお、この時点では、逍遙は「烏有先生」は鷗外その人であると見なしていた。のちに、鷗外ではなく、ハルトマンであることが明らかにされる。

(2) 若干の例證・「早稲田文学の没理想」で、鷗外は「烏有先生」の言として、孔雀の羽根の模様を司り美たらしめている存在、「祇園精舎の鐘の声、沙羅双樹の花の色」に接したときに美であると人間に感じさせる存在、モーツアルトの音楽にインスピレーションを与えた存在として、「理想」の存在を示している。なお、逍遙は、物には人によってさまざまな感じ方があることの証拠として、「祇園精舎の鐘の声」を、乙女は待人恋しと感じ、釈迦は寂滅為樂と感ずるなどの例を引いているが、鷗外は、これは意識的・後天的な判断であつて、無意識的・先天的には、どのような人でも美と感ずるのだ、としている。すなわち、鷗外は、世界を意識的・後天的な世界と無意識的・先天的な世界に分けて、美を一方では産みだし、一方では判断する「理想」の存在を後者の世界に置いていたのである。

(3) 叙情詩もしくは小説に主観の感のあらはる、ことの……作者の理想作者の意見のあらはる、こと、これもまた然りと思へり。叙情詩や小説では、地の文に作者の感想や意見などが入り込み、それを通して作者の人生観が現れやすい。これに対して、戯曲では、台詞や

ト書きなど客観描写が主となるので、比較的作者の感想・意見は入り込みにくい。しかしながら、登場人物の思想・言葉・行動、また筋や脚色など作品全体が作者の人生観を表わしている。以上のような考えに基づいている。なお、「作者の意見」は、初出「作者の極致」。

(4) シェークスピアの傑作・初出「傑作」に傍点。傑作では没理想だが、そうでない作品では、理想が見えるというのが逍遙の考え。

(5) 全局・初出圏点。作品全体のありさま。登場人物や場面といった作品の個々の要素に対して全体をいったもの。一人物には理想が現れているが、全体を通してみると理想は分らないという考え。

(6) 造化の本来面目・「シェークスピアの本来面目」と対置されていることから分かるように、造物主の作意のこと。当時は、ショーペンハウエルなどの厭世哲学が流行する一方で、ダーウインの進化論も紹介され、これに伴って、いわゆる社会的進化論といわれるスペンサーの思想も流行していた。宗教についても、仏教・キリスト教・ユニテリアンなどさまざまな宗教が乱れ咲いており、神の有無可知不可知、また、その性格についての議論が盛んであった。坂井健「没理想論成立の背景―宗教の混乱とユニテリアンの流行―」(『京都語文』六号、二〇〇一年一〇月)参照。

(7) 絶対的の意味にて、見る可からずといはず・初出「絶対的」、「見る可からず」に圏点。

(8) 絶対的の意味にて見る可からず・(7)と同様。

(9) 経見の結果・経験して見た結果。西洋の先学のシェークスピア研究の結果であることについて。

(10) 最も傑出せるもの、みをいへり、悉皆を指せるにあらず・初出「最も傑出せるもの、み」に傍点、「悉皆」に圏点。

(11) かりそめにも異説を容れ、反対の解釈を容れ得る間は、仮にシェークスピアの傑作を名づけて、没理想と云ふも不可なからん・さまざまな解釈が成り立つのは、理想が見えないからだという考え方。

(12) イヤゴー・初出「イヤゴー」。オセロの部下。オセロに妻に対する疑いを持たせ、破滅に追い込む人物。

(13) エドモンド・リア王に対して謀反を起こし、コーデリアを殺す人物。

(14) リチャード三世・エドワード四世のせむしの弟。肉親・政敵を謀殺し、王位につく人物。

(15) 想・ここでは登場人物に表れている作者の人生観・人間観、といった意味。ふつう、「想」は「想を練る」といったように、作品のイメージ、アイデアを指すが、当時は「想が高い」といったように、作品を支えている作者の人生観や着眼点などを指すことがあった。

鷗外はこれをイデーの訳語に当てており、一種の混乱である。

(16) 情性・初出「性情」。逍遙選集の誤植か。

(17) 実の象にあらずして、想の影なることいちじるし・実在の人物によつたのではなくて、作者の悪人観が現れたものである、ということ。

(18) 結象・具体化。当時の concret の訳語。

(19) わろかるべきが・初出「わるかるべきが」。

(20) ティヌ・初出「ティン」。フランスの文学研究者。文学研究に科学的方法を導入したことで知られる。主著『英文学史』。

(21) 辨析・分析。

(22) シェークスピアの作が没理想なるが故なり・初出圏点。

(23) 『女学雑誌』の投書家某・撫象子、すなわち、巖本善治を指す。以下は、『女学雑誌』二九〇号(明治二四年一月七日)に掲載した「シェイクスピアの理想」を指す。

(24) フォールスタッフ・「ヘンリー五世」に登場する脇役で、喜劇的人物。

(25) ヘンリー五世・「ヘンリー五世」の主人公。放蕩無頼の王子から、理想的君主へと変貌する。

(26) 屢々・初出「しばしば」圏点あり。

- (27) 幾度も序曲といふ物を用ひて、コーラスに物語をせさせたり・作  
品中、コーラスが劇の進行に大きな役割を果たすが、これが主人公  
の賛美につながるので、作者の考えが現れているとするもの。
- (28) 有挿評の拙き勸懲小説・叙述の間に、作者の主人公や事件に対す  
る意見や感想が入り込んでいる、勸懲小説を指す。
- (29) 余蘊・言い残したこと。
- (30) わが戯曲の説と大いに抵触する所ありとしも思はず・どのような  
戯曲が優れているかという問題に關しての逍遙の見方と鷗外の見方  
とが、あまり違わないということの確認。相違点については、以下  
にまとめられている。
- (31) ハルトマンが無意識の哲学・世界は無意識者が姿を現わしたも  
のであるとする考え方。これがヘーゲルだと、神がイデーを通して自  
己を實現した、ということになる。ハルトマンにしたがえば、美の  
仮象に無意識者の面影が現れるので、そのようなものに出会うと、  
我々は自らがよつてきた無意識者への回帰を感じ、美と判断する  
ということになる。
- (32) 想と実との關係・イデーと實在の關係。たとえば、プラトンであ  
れば、イデーが實在で、現象はその影に過ぎない。ハルトマンの場  
合、万物の根源たる無意識者が現れたのが現象世界である。現象世  
界から刺激を受けた主体が、主体の中に写象を形成し、それが実を  
離れた場合に美的な仮象となる。これは無意識者の映し絵的存在で  
あり、それによつて美の普遍性が保証される、ということになる。  
ただし、これは『美の哲学』にある話で、これまでの鷗外の論では、  
美は物質的な「実」ではない、形のない「想」であり、世界にはこ  
の「想」が満ちあふれていて、美に出会うと、「先天の理想」がこ  
れが「美」であると叫ぶのだ、と述べられているに過ぎず、詳しい  
説明はない。鷗外の論では、想実二元論でハルトマンを理解してい  
たために、「美」でないものは、皆「想」になってしまつていたが、  
ハルトマンでは前述のように、物質でないものについても、細かい
- 区分がされており、二元論で済ませることのできるものではなかつ  
た。
- (33) 先生が意識を経て生まれいでぬる無意識の哲学・意識を通して無  
意識が生まれるというのは、一種の語義矛盾である。したがつて  
「如何なる形をもてるか」ということになる。
- (34) その究竟目的の在る所を問ふのみ・前述したように、当時はさま  
ざまな哲学・宗教が氾濫し、混乱していた。逍遙は、そのどれも  
安んずることができず、懷疑に陥つていた。世界の帰趨の目的を知  
ることは、安心立命のためにも必要であつた。没理想論は、美学的  
問題だけではなく、逍遙の人生観的な問題の必然から生まれたとい  
える。
- (35) ハルトマンは最近哲学の大祖師なり・ハルトマンの美学を初めて  
紹介して、大きな影響を与えたのは鷗外であつたが、ハルトマンの  
哲学そのものは、当時すでに紹介されており、ショーペンハウエル  
と並ぶ当時の代表的な厭世哲学の思想家としてその名を知られてい  
た。
- (36) そが形而上学を、『柵草紙』の限りある紙上に述べよ、と乞はん  
は、恐らくは無理ならん・後に鷗外は、これに答えるように、『柵  
草紙』誌上に『審美論』の訳を連載することになる。
- (37) 我れ不学なりといへども、多少の有縁境にあり・謙遜な逍遙の物  
言いであるだけに、重要である。逍遙は、決して観念論美学に暗か  
つた訳ではなく、それ相應の知識を持つており、その上での没理想  
論であると考えるべきであらう。
- (38) 大明・太陽のこと。
- (39) 海角・海の果て。
- (40) 群陰皆影を伏す・さまざまなのがすべて影を伸ばす。日の出に  
太陽が万物を照らし出すさまをいう。
- (41) 雲漢・雲の塊。
- (42) 弥生の空のおぼろ月の・逍遙の雅号「春の屋おぼろ」にかける。

(43) 今尚ほ・初出なし。

(44) 先生は已に立てり・烏有先生(ただし、逍遙の思い込みでは鷗外)は、すでに真理を会得しているのだ、の意。したがって、「文界の衆生を濟度せよ」と続くことになる。(6)

(45) 明治文学の為に素材を蒐めん・「談理」に対する「記実」主義の態度の表明。自分の基準にしたがって主観的に作品の善し悪しを批評してゆくよりも、その作品そのものがどのような作品であるかを客観的に記述することによって、将来のために役立つ素材としようとする態度の表明。

(さかい たけし 国文学科)

二〇〇〇年十月十八日受理